

スパルタ病理塾 あなたの臨床を変える！ 病理標本の読み方

小島伊織(執筆)

総合南東北病院外科

中山祐次郎

写真と絵でいっぱい、 病理のことを知る「読み物」

この『スパルタ病理塾』は、新進気鋭の若手病理医による病理診断の入門書である。なるほど著者は研修医を終えた後も病理医をやりながら月2回の内科救急当番を続けていただけであり、病理医以外の臨床医が「何に悩んでいるのか」「何を知りたいのか」を存分に熟知している。そのコンセプトは本書にも随所に生かされている。本書は病理学の体系的な教科書ではなく、「読み物」として読者が読みやすい流れを意識してまとめてあり、病理への苦手意識がある医師・医学生にはとてもよいだろう。写真が多いのもありがたい。卒業後14年目の消化器外科医である私も、歯ごたえを感じつつ面白く読めた。

まず第1章では「病理所見で何を認識し、どう診断に至るのか」という、病理医の思考の道筋を丁寧にぞってくれている。私が膝をたたいたのは、臨床医の診断の進め方と病理診断の進め方を、フローチャートにして対比させている図であった。無学な外科医である私のイメージでは、「病理医はプレパラート数枚からバシッと病気を診断する魔法使いのような存在」であったが、その図によれば患者背景、病歴、身体所見、画像検査所見などとともに組織を観察し、必要に応じて特殊染色を追加し診断を絞っていくという。これには衝撃を受けた。研修医の頃習った「tissue is issue」というpearlを金科玉条とし、思い返せばただtissue(生検組織)を提出するだけで後は自動的にチーンと診断が出てくる、そんなふうに考えていた自らを恥じた。

第2章では弱拡大での観察がいかに大切かを、美しい病理写真とカラフルなシェーマでかみくだ

いて教えてくれる。それ以降の章では、緩やかに各論が示されていく。特に臨床医の最も関心事であるだろう「腫瘍」と「感染症」については、まるで一緒に顕微鏡をのぞいて著者がレクチャーしてくれるような読み心地である。続いて、なんとなくわかった気がしていたPAS・Azan・EVG染色などの特殊染色や免疫染色についても、「そうだったのか!」の連続であった。さらには最終章で病理所見のプレゼンテーションのやり方をひもといっており、これでカンファレンスの病理医の発表の意図がわかってきた。最後につけられた付録もぜひたくで、「検体はどのように提出したらよいか」「病理診断の依頼には何を書いたらよいか」など、臨床医が日々疑問に思うことに明快に答えてくれている。

本書は『スパルタ病理塾』という書名ではあるが、著者の読者へのまなざしは春の日だまりのようにあたたかい。若手医師教育を続けてきた著者の高い教育的技量に裏打ちされた熱意が、紙面に横溢しているようだ。「はじめに」に書かれた著者の言葉「病理と臨床の間に壁はない」は、本書を読み終えた今となつては強く同意できるものである。この本を読めば、病理医-臨床医間のコミュニケーションエラーも減りそうだ。来週あたり、病理室に行ってみよう。



●A5/頁 206/2020 年
定価：本体 3,600 円＋税
[ISBN978-4-260-04130-0]
医学書院 刊